

Outline of research activities: Textiles excavated from the Former Soviet republics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MURAKAMI, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064496

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



旧ソ連圏から出土した染織品の調査

村上智見

I. はじめに

かつては外国人による学術調査に多くの制限があり、学術交流にも困難が伴った旧ソ連諸国も、今日では外国隊による発掘調査や資料調査が盛んに行われるようになってきている。旧ソ連圏から出土した染織品としては、ソ連時代にシベリア、コーカサス、タジキスタン、モンゴル等で行われた発掘調査により出土した染織品が、今日においても質・量ともに最も優れた資料群を形成しており、エルミタージュ美術館の展示に彩りを与えている。加えて、ソ連崩壊後に実施した発掘調査によって新たに出土した染織資料も増えつつあり、また旧ソ連時代に発見されたものの未報告の資料も数多く存在することが分かってきた。古くから東西をつなぐ道の通っていた中央ユーラシアのオアシスと草原地帯は、その東西交渉を反映して出土染織品の宝庫であり、未報告・未調査資料が多く存在する旧ソ連圏出土染織品は、我が国に伝わった染織品および染織技法を考える上でも重要である。本稿では、各地の染織文化解明および東西交渉の一端を明らかにすることを旨として、筆者が旧ソ連圏において実施してきた調査・研究の状況について報告する。

II. 調査の概要

1. ロシア連邦

1-1. ブリヤート共和国

2016年2月29日～3月4日、10月26日～27日にかけて、ロシア科学アカデミーシベリア支部のモンゴル・仏教・チベット研究所において、ブリヤート共和国から出土した染織品の調査を実施した。

その結果、匈奴期から中世までの染織品を確認した。キャフタのイリモヴァヤ・パジ遺跡 54 号墓 (Ильмовая падь, курган №54) 出土品中には、漢代の経錦や、モンゴルのノイン・ウラ匈奴墓および中国の馬王堆漢墓出土品と同じ菱文の羅織物が含まれ

ていた [Murakami 2017]。チェリヨムホヴァヤ・パジ遺跡 (Черёмуховая падь) からは匈奴期のものとみられる獣毛製の平織物が確認できた。糸は Z 方向に強く撚られており、モンゴル出土の匈奴期染織品と類似する。この他、元代のものとみられる金襴や羅が、ボドン (Бодон)、タンハル (Танхар)、ヤリクト (Ярикт)、キャフタ (Кяхта)、バルグジン (Баргужин)、ヨンホル (Ёнхор) 等の諸地域から、また、ドグド (Догдо)、ホドン・ボル (Ходон бор)、ハスハル (Хасхал) からも中世以降の染織品を確認した。

これらの染織品についてはこれまで詳しい調査研究が行われていないことから、今後モンゴル・仏教・チベット研究所の諸先生方と共に研究を進める予定である。

1-2. カラチャイ・チェルケス共和国

2017～2018年度にかけて、グラバル全ロシア芸術保存センター (モスクワ) のナタリア・シニツナ氏、オルガ・オルフィンスカヤ氏らが実施するニジニ・アルヒズ (Нижний архыз) のアラン人墓より出土した染織品 (8～10世紀頃) の保存修復プロジェクトに参加した (図1)。モスクワにおける保存修復作業のほか、2017年7月19日～8月1日までこれらの資料が所蔵されるロシア科学アカデミー宇宙物理学研究所附属ニジニ・アルヒズ考古学博物館に滞在し、企画展開催と資料調査を実施した。

出土染織品は多様であり、ビザンティンやソグド錦に分類される絹製緯錦や麻製平織をはじめ、中国製の絹の夾纈染めや絹絵等も認められ、この地が東西を結ぶ重要な交易路上に位置していたことが伺える。中には我が国の法隆寺や正倉院宝物にも類似した連珠円狩猟文綾等も見られる。保存状態は比較的良好で柔軟性があり、衣服の襟や襟、裾、靴下など



図1 アラン人墓周辺に残る廃教会

の形状をとどめるものもある(図2)。

当該地域では近隣のゼレンチュク郷土史博物館にもアラン人墓出土品が展示されており、出土染織品の一部を見ることができる。これらは同時期のアラン人墓として有名な、モシェヴァヤ・バルカ遺跡(Мошевая балка)出土染織品と多くの共通点が認められる。シムルグ文のカフタンに代表されるモシェヴァヤ・バルカ遺跡出土染織品の数々は、エルミタージュ美術館で見ることができる。これまでコーカサス地域出土染織品については、イェルサリムスカヤ氏[Jerusalimskaya A. A. 2012]、オルガ・オルフィンスカヤ氏[Orfinskaya O. V. 1991]らがまとめている。しかし未報告資料が多いことから、今後は特に緯錦と狩猟文綾に着目し、東アジア出土品との比較を進めたいと考えている。

1-3. ヴォルゴグラード州

2018年3月20日～21日にかけて、思いがけずジョチ・ウルス期(14世紀頃)の染織品を熟覧する機会に恵まれた。ヴォルゴグラード州郷土史博物館において、ソフィア・シャシュノヴァ氏が実施する染織品調査に同行した。

博物館にはヴォルゴグラード州の各地から出土した染織品が所蔵されており、そのうちのキリャコフカ(Киляковка)、ヴァフティヨフカ(Бахтиевка)、ヴェルチャチ(Вергячий)、チェニン(Ченин)から出土した染織品を実見することができた。中には非常に良好な残存状態の金襴の帽子等もみられた。織物の種類としては、羅、綾、緯錦、金襴(平金糸、撚金糸)などが確認でき、緯錦を除いてはモンゴル高原から出土する元代染織品とほぼ共通した特徴を有していた。

この他にも、ヴォルゴグラード州やアストラハン州などでは多くのジョチ・ウルス期染織品が



図2 保存修復中のニジニ・アルヒズ出土衣服

出土しており、主にソフィア・シャシュノヴァ氏[Shashunova S. M. 2019]、オリガ・オルフィンスカヤ氏[Fedotova Yu. V. et al. 2015]、ズヴェズダナ・ドデ氏[Dode Z. 2018]等により保存修復や調査が進められているが、いまだ未調査・未報告資料が多く、さらなる研究の進展が望まれる。

2. ウズベキスタン共和国

ソグディアナ製織物の特徴を明らかにする目的で、2010年度からウズベキスタンを中心に調査を実施している。一般にソグディアナは中国やコーカサス出土品、そしてヨーロッパの教会などユーラシア各地に存在する「ソグド錦」の産地とされているが、実際のところソグディアナから出土した染織資料は極めて乏しく、本当に「ソグド錦」に分類される染織品の産地なのか、どのような染織文化が存在していたのかについては不明な点が多い。

そのような中、2013年度から実施しているカフィル・カラ遺跡(Кафир-Кара)発掘調査において、8世紀初頭のイスラム勢力侵攻時の火災で炭化した染織品の小断片の出土が相次ぎ、これまでに平織物、綾織物、絵緯織物、錦、パイル状織物、編布(もじり編様)、縄状繊維、フェルト状繊維など、在地の技法が明らかになりつつある[村上ほか2021]。錦、フェルト、編布の繊維材質に関しては未調査であるが、その他は全て棉製であることが分かった。カフィル・カラ遺跡に近いジャル・テパ遺跡(Жартепа)でも、同じく炭化した8世紀初頭の染織品が出土している。当該地域では、このほかにも紀元前13～9世紀ごろに属するとみられるコク・テパ遺跡(Коктепа)出土土器に残された布圧痕の調査を実施した。布圧痕が残された土器片は300点にのぼり、ブルーミックスを用いて転写した結果、もじり編みとみられる編布の他、各種の平織、綾織などが



図3 コク・テパ遺跡出土の土器布圧痕

確認できた(図3)。すでにこの時期には多様な織物を製作していたことがわかり興味深い。これらはいずれもウズベキスタン科学アカデミーサマルカンド考古学研究所が所蔵している。

ソグディアナに隣接するチャチ地域からも面白い資料を確認している。カンカ遺跡(Канка)のゾロアスター教寺院からは、7～8世紀に属すると考えられる織物断片が供物と共に炭化した状態で出土した。これらを調査した結果、つづれ織、アップリケなどであることが判明した。つづれ織りは今日のウズベキスタンをはじめとした中央ユーラシア地域において、民家などでも織られる一般的な織物であり、カンカ遺跡出土品はウズベキスタンにおける最古の例となる。アップリケについては、ベースとなる平織の上に文様の形に切った別の平織を配置し、文様の縁を平織を丸めた紐で縁取るという他に例のない技法であり、当該地域独自の技法と考えられる[村上2012]。当該資料についても、ウズベキスタン科学アカデミーサマルカンド考古学研究所が所蔵している。

さらに隣接するフェルガナ地域のムンチャク・テパ遺跡(Мунчак тепа)からも、6～7世紀ごろに属するとみられるまとまった染織品の出土がある。趙豊氏らによって詳しい調査が行われているが[馬特巴巴伊夫・趙豊2010]、調査の機会が得られたことから、特に未調査の綾に関する報告を行った[村上2016]。当該遺跡出土染織品の材質は、わずかに棉の痕跡がみられるほかはすべて絹製であり、平織・綾織は中国製と推測される。この他、平組織緯錦は太いZ撚りの糸を使用しており、現地製と考えられた。これらの染織品はパプの地方博物館に所蔵されている。この他にもパイケンドで棉製平織の小断片、古代テルメズからは6世紀の上衣や靴下が出土している。

3. タジキスタン共和国

ソグディアナ出土染織品として最もよく知られているのが、タジキスタン共和国ムグ山上遺跡より出土した保存状態良好な豊富な染織品群である。2018年度にエルミタージュ美術館において調査する機会を得た。大部分は棉織物であるが、中国製の綾や経錦などの絹織物も含まれる。絹織物はほとんどが中国製であるが、1点のみ現地製と考えられる緯錦が含まれていた。中国製の小連珠円八弁花文経

錦は、我が国の正倉院、新疆ウイグル自治区のアスターナ古墓、モンゴルの僕固乙突墓などからも出土しており、同一の技法・文様である[村上2021]。

この他のソグディアナ出土染織品としては、タジキスタンのサンジャル-シャー遺跡(Санджар-Шах)出土の子供用衣服が知られている[Terlyakova A. 2014]。

4. キルギス共和国

2017年10月26日～30日にかけて、首都ビシュケクにあるマナス大学において、青銅器～初期鉄器時代に属するとされるコチコル溪谷のチャブ集落(Чаб)出土土器10点の布圧痕を調査する機会を得た。

布圧痕を粘土に転写し観察した結果、ウズベキスタンのコク・テパ遺跡同様、平織、綾織、もじり編みとみられる編布などが確認でき、複数種類の布製作技法が存在していたことが分かった。実物資料が存在しない当該時期の染織文化を復元するに際して重要な資料である。今後さらに出土例を収集し、当該時期の染織文化の一端を明らかにしていきたい。

III. おわりに

調査内容と成果についてはかなり詳細を端折ったが、該当地域でのおおよその調査状況はまとめられたように思う。面白い発見は数々あるが、これまでのところで最も大きな成果は、不明な点の多かったソグディアナ製染織品の特徴のいくつかが明らかになったことである。

筆者の研究テーマに基づいて、当初目的とする調査対象の資料は主に漢から唐代までの染織資料であったが、調査を進めてゆくと青銅器～鉄器時代の布圧痕や元代以降の比較的新しい資料も各地に豊富に存在しており、これらも同時に調査してほしいという現地研究者の要望が大変多いことが印象的であった。今後も漢～唐代に主眼を置きながらも、できる限り要望にこたえていくことで、さらに広い時空間における染織文化の復元が可能になるかもしれないと期待している。

本来ならばモンゴル出土品も含めて現在までの調査状況を伝えたかったが、モンゴル国で調査した資料は時代も多岐にわたり、またその点数も非常に多いため、紙面の都合上別稿でまとめたい。

参考・引用文献：

Dode Zvezdana: Доде Звездана, 2018, Предметы женского костюма из золотоордынского захоронения могильника Тингутинский I. Консервация и предварительные выводы, *Tyragetia, serie nouă, vol. XII [XXVII], nr. 1, Arheologie, Istorie Antică, Muzeul Național de Istorie a Moldovei: Chișinău.* [Parts of the female oostume from a Golden Horde Grave of the Tingutinsky I Kurgan Cemetery. Conservation and preliminary conclusions, *Tyragetia, new series, vol.12 (27)-1, The national museum of history of Moldova.*]

Fedotova Yu. V., Sinitsyna N. P., Orfinskaya O. V., Vizgalova M. Yu.: Федотова Ю. В., Синицына Н. П., Орфинская О. В., Визгалова М. Ю., 2015, Реставрация и исследования археологического текстиля периода Золотой Орды из захоронения болгарской женщины (конец XIV в.), *Поволжская археология, 2015-3(13)*, Казань: «Фэн» АНРТ: 74-91. [「ブルガリア女性埋葬墓(14世紀末)から出土したジョチ・ウルス期織物の修復と研究」『The Volga river region archaeology』2015-3(13)]

Ierusalimskaya A. A.: Иерусалимская А. А., 2012, *Мошевая балка: Необычный археологический памятник на Северокавказском шелковом пути*, Санкт-Петербург: Эрмитаж. [『モシェヴァヤ・バルカ: 北コーカサスのシルクロードの稀有な遺跡』]

Murakami Tomomi, 2017, Investigation of the textiles from the Xiongnu period found in the Republic of Buryatia, Symposium of Conservation of Cultural Heritage in East Asia in Shanghai.

Orfinskaya O. V.: Орфинская О. В., 1991, Реконструкция одежды населения Нижнеархызского городища VII–IX веков, *Вопросы археологии и истории Карачаево-Черкесии*, Черкесск: 112-123. [「7～9世紀のニジニエアルヒス城址住民の衣服の復元」『カラチャイ・チュルケスの考古学と歴史の問題』]

Sashunova S. M.: Шашунова С. М., 2019, Золотоордынский текстиль в коллекции Волгоградского областного краеведческого музея, *Искусство древнего текстиля: Методы изучения, сохранность, реконструкция*, Москва: Институт археологии РАН: 223-239. [「ヴォルゴグラード州郷土史博物館コレクション中のジョチ・ウルス期の織物」『古代染織芸術: 研究法、保存、復元』]

Tepliyakova Anastasia, 2014, Textile Objects from the Citadel

of Sanjar-Shah, *Bulletin of Miho Museum, vol. 15*, 秀明文
化財団: 167-183.

馬特巴巴伊夫・趙豊主編 2010『大宛遺錦: 烏茲別克斯
坦费尔干納蒙恰特佩出土的紡織品研究』上海古籍出
版社.

村上 智見 2012「中央アジアのチャチ出土織物類につ
いて」『ラーフィダーン』33号 国士舘大学イラク古
代文化研究所: 15-23.

村上 智見 2016「フェルガナ地方ムンチャク・テパ遺
跡出土の絹織物」『奈良大学大学院研究年報』21 奈
良大学大学院: 43-54.

村上 智見・寺村裕史・ベグマトフ アリシェル・宇野隆夫・
宇佐美智之・ベルディムロドフ アムリディン・ボゴ
モロフ ゲンナディー 2021「ウズベキスタン共和国
カフィル・カラ遺跡発掘調査 2020 年度までの成果
—出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流—」『第
28回 西アジア発掘調査報告会報告集: 令和2年度 考
古学が語る古代オリエン』日本西アジア考古学会:
80-84.

村上 智見・A. オチル・L. エルデネボルド 2021「モン
ゴル国の唐様式墓から出土した染織品: 僕固乙突墓と
オラーン・ヘレム壁画墓」『金大考古』79 金沢大学
人文学類考古学研究室: 52-67.

図版出典：

図1～3 著者撮影